

仕上げに恋をひとつまみ2

Y u i ♪ T a t s u y a

広瀬もりの

Morino Hirose

termity



エタニティ文庫

目次

| | | |
|-----|--------------|-----|
| 序章 | 君と団子と秋の空 | 4 |
| 第一章 | スイーツな依頼は嵐の予感 | 30 |
| 第二章 | 迷子の迷子の恋心 | 162 |
| 第三章 | 丸ごとすべて召し上げ！ | 273 |

序章 君と団子と秋の空

今年の夏は終わらない。

九月になってもまだまだ真夏のような強烈な陽射しが、住宅街のアスファルトを谷赦なく照りつけてくる。あまりの暑さに、駅から一步踏み出してすぐに足が止まった。

だけど、私はそれでも前に進まなくてはならない。この灼熱地獄の先に、向かうべき場所があるんだから。

私、田村結衣、二十三歳。と言っても、あと二ヶ月で二十四歳になる。去年の春に美大を卒業して、「如月企画」という企画会社に入社した。肩書きはウェブデザイナーだけど、雑用もいろいろやっている。

そんなある日、タウン誌の取材で訪れたケーキショップの手伝いをするようになって、あれよあれよという間に、今ではそっちをメインに働いている。世にも不思議な物語だ。会社の方は仕事を立て込んだときだけ声を掛けられるんだけど、そんな呼び出しも最近はめっきり減った。今はどこも不景気のようなから仕方ないだろう。

ただね、会社での仕事が減ると、現金収入がなくなるのが困りもの。ケーキショップでのお給料はすべて現物支給で、これでは胃袋は膨れても財布は寂しくなるばかりだ。うーん、困った。でも、こればかりはいくら騒いだところで仕方ない。

そんなわけで、今朝も会社ではなくケーキショップに向かうところだった。直線距離だとそれほど遠くないのに電車を二回も乗り継ぐうえ、駅から長い坂道を登らなくてはいけないのが難点だ。

その坂を登り切った住宅地の一角に佇む、ケーキショップ『petits bours』。そこにはこの世のものとは思えないほど美味しいスイーツがずらりと並び、美術室のデッサン用石膏像のように整った顔立ちのパティシエ兼店長、神崎竜也がいる。見た目と職人としての腕前は最高なのに、性格にやや難アリの彼。取材で店を訪れた当初は、あまりの俺様な態度にかなり面食らった。だけど、人生とは摩訶不思議なもの。今ではすっかり仲良くなっちゃって——って、この表現で合ってるよね？ うん、恋人同士なんだから間違っではない。

さあ、暑いからって、こんなところでいつまでもうだうだしてても仕方ない。急がなくなっちゃ、今日はお彼岸の日曜日で久々のかき入れ時なんだから。

え？ お彼岸なら普通は和菓子だらうって？

ううん、そんなことないよ。今時はケーキをお供え物に選ぶ人も結構いる。それに抹

茶ちやや小豆あずきを使ったケーキやゼリーもあるので、あまり抵抗はないみたい。意見を決して歩き始めたところで、突然、バッグの中の携帯が鳴り出した。

「——あれ？　なんだろ、会社からかな。まさか仕上げたデータに不備があったとか？　えーっ、今から引き返すのは大変だよー」

これからすぐに向かうつて店長にメールしちゃったのに、遅くなったらまた機嫌が悪くなっちゃう。いや、もしかしたら、その店長からの「早く来い」という催促さぶそくかも。やゝん、私つては愛されちゃってる！

そんなことを考えながら、携帯を引つ張り出す。だけど、発信元の名前を確認した瞬間、私の思考はびたりと止まった。

およそ十分後。

ふらふらになってようやくやくとり着いた店内は、外とは打って変わって極寒地帯だった。毎日のように体感していても、この急激な温度差にはまったく慣れることができない。ケーキにはこれくらいがちょうどいいらしいが、モノには限度があると思う。

私はあまりの寒さに二の腕をさすりつつ、これから店を抜けなくてはならないと店長に切り出した。

「なんだ、それはどういうことだ」

こんな氷の監獄かんごくに自ら好きこのんで居座る魔王は、本日も低気圧ど真ん中だ。長いコック帽を被り、一寸の乱れもない完璧な顔立ちを歪ゆがませている。

すらりとした長身に、ハーフと見まがうほど彫りはの深い顔立ち。色素が薄くて目や髪が茶色っぽいところも堪らなくオシャレだ。きめの細かいミルク色の肌にパティシエの仕事着が似合うこと似合うこと、彼目当てに訪れるリピーターはたくさんいる。

彼氏だつていう鼻屑目ひいきめを抜きにしても、店長はものすごく格好いいんだよ。本人が断るからメディアアへの露出は極端に少ないものの、ちらっとでも紹介されれば、さらなる売り上げが期待できそうなくらいだ。

近頃の彼はやたらと嫉妬しよと深い。二言目には「浮気した、浮気した」って……それも、人間相手じゃないんだよ。あろうことか、私がひとりで美味しいものを食べに行っただけで怒る。

「どうもこうもないです。今、お話ししたとおりですけどっ」

だけど、これしきのことでは負ける私じゃない。これでも最初の頃に比べたら、ずいぶんと図太くなつたと思う。端から見れば喧嘩けんかをしているような会話だけど、ふたりにとっては当たり前のコミュニケーションだ。うん、これくらいの態度だったらまだ和やかな方だよ。

私は大きく深呼吸をしながら、どう説得しようか話す順序を考える。ここでミスをする

ると、あとが面倒なことになるのだ。

「花華さんからの誘いなんです。一度は断ったんですが、無理でした」

その名前を口にした途端、店長の暴言がぴたりと止む。ああ、痛快。いいなあ、これってまるで水戸黄門の印籠みたいだ。

——ええと、ちよつと説明。この「花華さん」というのは、今日の前にいるイケメンパティシエの実のお姉さんのこと。フリフリのお洋服が大好きな乙女街道まっしぐらのアラサーだ。

今はフリーでイベント企画の仕事をしているという彼女。あまりのインパクトに最初は気後れしていたけど、今では直接連絡を取り合う仲になっている。

彼女の娘である花音とは初めは険悪だったが、最近は妙に懐かれちゃってるしね。とはいえ、頻繁に預けられてこの店を託児所代わりに使われるのはちよつと困るけど。

さきほどの電話は、そんな花華さんから掛かってきたってわけ。

「だから、どんな誘いなのかと聞いている」

そりゃ、前もって承諾を得なかったのは申し訳ないと思ってるよ。でも、ついさっき連絡を受けたばかりなんだから仕方ないじゃない。花華さん、押しが強いんだもの。さすがあのわがまま花音のママだけのことはある。

「内容までは聞いてません。待ち合わせの場所と時間だけを伝えられて、あつという間

に電話が切れましたから。別に行ったっていいでしょう。ミズエさんに連絡したら助っ人に来てくれることになったし。……じゃ、そろそろタイムリミットなので」

ミズエさんというのは、この店が開店してからずっと勤めていたパートさん。彼女が腰を悪くして長時間勤務でなくなっただので、私が後釜に座ったのだ。今でも人手が足りないときには声を掛けて手伝いに来てもらってる。

開店準備はすべて終わらせているし、ミズエさんもそろそろ到着するし、なにも困ることはないはずだ。それなのにバッグを手に裏口から外に出ようとした私を、店長は先回りして通せんぼする。

「……おい、ちよつと待て」

えーっ、まだ食い下がるの？ 相変わらずしつこいなあ。

「夕方までにはちゃんと戻ってくるんだろ？」

そんなこと、約束できないよ。どうしても言うなら花華さんに直談判すればいいじゃない。

でもここは、あまり反発しない方が吉とみた。

「はい、できる限り努力させていただきます」

ひとこと言い返したい気持ちもぐっと堪えることに成功すると、自分がとても大人な気がしてくる。ようやく話に決着がつき、店長の脇を通り過ぎたところでふたたび呼び

止められた。

「結衣」

えー、まだ言い足りないの？ 本当に今日はどうしたんだろう。

そう思ってたなら、すごい早業はやわざで唇を奪われた。……なんかとてもレトロな表現だけど、まったくその通りなんだから仕方ない。しばらく私は思考停止して固まってしまった。

「浮気するんじゃないぞ」

なに言ってるんだよコイツ、と言いたいところなんだけど、その綺麗な顔で見つめられると、ついついぼーっとしてしまふ。

「……いつ、行ってきます……！」

はーっ、たったこれだけのことで心臓がバクバク。クーラー効き過ぎの部屋なのに、顔がどうしようもないほど火照ほてってしまった。

「はあーいつ！ 結衣さん、こっちこっち……！」

指定された待ち合わせ場所は、東京郊外を走る私鉄沿線のとある駅。自動改札を通り抜けた途端、大声で呼びかけられた。

うわわっ、花華さん……！

いつにも増して「いつたい、どうしちゃったの」と目を見張るほどコテコテナフリフ

リファッシュヨんだ。今日は一足早く秋を意識したのか、シックな赤を基調としていた。

ワンピースには大輪の花がプリントされていて、その下にレースてんこ盛りなベチコートを重ねている。さらに、羽織っているレース編みのポレロにはコサージュがいくつも付いている。かわいらしいリボンを飾ったふわふわな巻き髪には、かなり時間が掛かっているとみた。

……にしても、この暑さの中で、どうしてそこまできっちり着込めるんだろう。

花華さんの呼びかけにすぐに応えなくてはと思いつつも、無意識のうちに目を逸そらしてしまふ私がいいた。

「結衣さーんっ、こっちよー！」

いや、そんな風に手を振って自己主張してくれなくても大丈夫ですから。

周りの人もこちらを見ていてちよっと恥ずかしいけれど、私は意を決して彼女に駆け寄った。

「すっ、すみません！ ちよっと遅くなりましたか？」

これでも必死で急いんだけど、店長のあのキスにドキドキし続けちゃって、思うように走れなかったんだ。

「いいえ、大丈夫。でも急いだ方がいいわ」

相変わらず、花華さんは光り輝くように美しい顔立ちをしている。まあ、あの店長の

身内なんだから当然のことかもしれないけど、近くに寄るだけで全身から醸し出されるオーラにクラクラしそうだ。

「お店が忙しい休日に、こんな場所まで呼び出してごめんなさいね。でも、今日はどうしても結衣さんの力が必要だったの。私のために、是非是非頑張ってください」

……は？ それって、どういうことでしょうか……？

すると、両手をがばっと握りしめられ、見事にカールしたまつげに囲まれた瞳でうるうる見つめられた。

「私も、お友達から話を聞いたのが今朝起きてからだだったの。もう、いてもたってもいられなくなつて、すぐに結衣さんに電話しちゃったのよっ！」

「は、はあ……」

「——と、いうことで、早速行きましょうか！」

大手スーパーや銀行の支店ビルなんかがずらりと並ぶ通りを、花華さんはどどん進んでいく。

そして、辿り着いたのは、昔ながらの庶民的なムードがあふれる商店街だった。大小さまざまな店舗がずらりと並んで、まずまずの賑わいだ。なにかイベントでもやっているのか、『秋の大感謝祭』という派手な横断幕が掲げられている。風船を手にした子供たちが何人も歩いてるし、綿菓子やたこ焼きなどの屋台もたくさん出ていた。

鼻をくすぐるいい匂いに、思わず引き寄せられてしまう。

「うっわー、おいしそう！ 何軒か味見してもいいですか？」

なにしろ、今日は朝からバタバタしていて、朝ご飯も適当に済ませてしまったため、お昼近くなつた今ではかなり空きっ腹になつている。

「駄目よっ、今はそれどころじゃないの！」

花華さんは私の腕をガツと掴むと、さらに商店街を奥へと進んでいく。やがて目の前に現れたのは、小料理屋のような落ち着いた佇まいのお店だった。……ううん、違ふ。

ここは和菓子屋さん、かな？

「ああ、ここね。そうそう、お友達が写メで送ってくれたのと同じだわ」

花華さん、すごく感激しているみたいですけど、本当になりたいナニゴトっ!? そう思つて彼女が指を差している方を確認すると、そこにはひとときわ目立つ立看板があった。ええと、『楽々亭——看板商品「三色団子」朝食い大会』？

「良かった、出場者受付にギリギリで間に合ったみたい。さあさあ、早く行きましょう！」

あの……その、お、お姉さん……

まさか、私をこのイベントに参加させるつもりで、ここまで連れてきたの!?

……そう、私は類い希な胃袋を持つ女。

食べても食べても、なかなかおなかがいっぱいにならない。この事実が気がついたの

は、小学校に上がって給食を食べるようになってからかな。みんなと同じように食べても、午後の授業でおなかがグーグー鳴って大変だった。

さらに、私の特異体質にもうひとつ問題点があった。

それは、胃袋に詰め込むものが「美味しいもの」「自分の舌が満足できるもの」でないといくら量を摂ろうとも満腹感が得られず、それどころか逆に体調を崩してしまうことだ。こちらもお袈裟な話じゃなくて、病院送りになったことが二十余年の人生において両手の指に余るほどある。

そう、一時期メディアを賑わせた「大食いファイター」とは似て非なるものなのだ。

こんな体質なので、我が家のエンゲル係数は相当なもの。両親や他の兄弟は普通の胃袋だけど、私ひとりのために大変なことになっていた。もちろん、毎月きちんと食費を家に入れている。それでもかなり厳しいようだ。

賄い付きに惹かれて、レストランや食堂でバイトをしたこともある。でも、お店の料理が絶品でも賄い食が美味しいと決まっているわけじゃないんだよね。そんな悲しい現実におち当たったりもした。

だから、今の境遇は天国のよう。

取材をきっかけに出会った運命のケーキ。無愛想なイケメンパティシエが作り出すのは、私が生まれて初めて味わう究極の逸品ばかりだった。毎日大量に出る「切れ端ケー

キ」につられて店の手伝いを引き受け、いつの間にか人付き合いの悪い店長に気に入られて彼女に昇格。

そしてゆくゆくは……なんて、それはさすがに気が早いかな。

流されるまま、受付の列に並んで数分後。ようやく順番が来たところで、またまた「びっくり」が待っていた。

「は〜い、こちらに必要事項のご記入をお願いします。あと、参加費としておひとり様千円をお支払いいただきますので、あらかじめご用意くださいね」

……あれ。なんだ、お金を取るのか。

よくよく説明を見ると、とりあえず参加費として一皿分の金額を払うけど、お代わりはいくらでも自由とのこと。制限時間内に一番多くの皿を完食した人が優勝らしい。食べきれなかった分はお持ち帰りができるそう。

でも、私が驚いたのはそこではなかった。そう、私の目が釘付けになったのは、受付をしてくれた女性。なぜなら、この人が花華さんに負けず劣らずのひらひらファッションだったからだ。

で、でも、いったいおいくつ!? だって、そばに座っているちっちゃい女の子が、彼女を「お祖母ちゃん」って呼んでるしっ。でも絶対、孫がいるような年齢には見ええない……

「まあっ、もしかしてそのお洋服、幻と言われている××年発売の限定商品じゃないですかっ……！」

花華さん!? なに、いきなり反応しているんですか。確かに目の前の方は、あなたと同じオーラを感じますけどっ。

すると、花華さんの言葉を聞いて受付の女性もぱっと目を輝かせる。

「ええ、その通り。よくわかりましたね! まあ、あなたのお洋服も素敵! それって△△シリーズの新作でしょう。とても良くお似合いだわ〜」

そして、ひとしきり内容のまったくわからないガールズトーク(?)が繰り返げられた。なんなのこの人たち、違う星の住人みたいだよ!

「あの、お取り込み中申し訳ないけど、ちょっといいかしら?」

そうこうしているうちに、そこに今度はかちつとしたスーツを着込んだ女性が登場した。

あ、こっちは人は普通だわ。良かった、みんながみんな同じような服装の方たちだったらどうしようかと思っちゃった。

スーツ姿の彼女は、少し眉をひそめて言う。

「ママ、困るわ。そろそろ開始時間だから、おしゃべりはほどほどにしてね」
えっ、この受付の方がこの人の「ママ」っ!? ええと、このスーツの女性ってどう

見ても花華さんと同世代くらいだよな? その方のお母さんってことは……いやいや、これ以上考えるのはやめよう。なんか頭痛がしてきた。

「すみません、お邪魔してしまいました。じゃあ結衣さん、行きましょう。わかっているわねっ、ぜーったいに優勝! 期待しているわ〜」

お店ののれんをくぐると、目の前には「優勝賞品」がどーんと飾られていた。そして、私はようやくすべてを悟った。

だって、それは……さっきの受付の女性の服よりも、今となりにいる花華さんの服よりも、もつとすごい乙女なワンピース。さらに、ペチコートやボレロに上着、帽子にバッグまでついた一揃えだったのだ。

それから、数時間後。イベントは無事終了。

花華さんと私は、帰路についていた。彼女の手には大きなショップの袋。その中に入っているのは、もちろん先ほどの早食い大会の優勝賞品だ。

「ああんっ、もう結衣さん最高! 本当にありがとう! このお洋服のシリーズはね、マニアの間でもすごく有名なの。ブランドができたばかりのときのもので、今では古着でもほとんど出回っていないくて……それが、こんな場所に出てくるなんて意外だったわ。もうっ、夢みたい! 家に帰ったら早速ファッションショーだわ!」

「そ、それは……良かったですね」

やっぱり話についていけない。

もちろん私だって、お洒落しやれにまったく関心がないわけではない。美大生だったし、綺麗なものも可愛いものも大好きだ。だけど、現実問題として、私は「衣」よりも「食」が優先。服にあまりお金をかけないよう普段着は量販店で安く買っている。お気に入りブランドは年に何回かのお楽しみと決めているし、そのときでさえも一番気に入った一枚だけを購入しているのだ。

ああ、さすがにちよつと胃が重いかな。空すきつ腹にいきなりあの量はきつかった。

それに私、大食いはできても早食いはそれほど得意じゃない。うん、やっぱり美味しいものは時間を掛けてゆっくり食べたいなあ。

幸い、その三色団子はとても美味しかった。ピンクと白と緑、三色の大振りのお団子が串に刺さっていて、そのひとつひとつが違う味だった。白は普通のお団子だけど、ピンクは桜風味で、緑はよもぎ味。さらに、見た目からは分からないけど、実は中に餡あんが包んである。そのほどよい量と甘みのバランスは絶妙だ。だから、どんどん食べられて、花華さんの期待にも見事応えることができた。本当に今までの人生で食べたお団子の中で、五本の指に入る美味しさだった。

でも、どうして賞品が乙女なワンピースだったんだろう？ そこがまったくわからない

いんだけど、役目は果たしたんだし、もうこれでいいよね？

「だけど、いいのかしら？ 副賞のお団子を私が全部いただいたらちやつて。せつかくだから、結衣さんも半分持つていけばいいのに」

「い、いえつ、大丈夫です。私はもう、十分すぎるくらい食べましたから……是非、あとは花華さんのご家族で召し上がってください」

これから真つ直ぐ自宅に戻るならまだしも、その前にあの「氷の監獄かんごく」に立ち寄りたくちやならない。下手に持つていったら、また「浮気した」とか言われてしまう。

「そう？ なら、遠慮なくいただきたいしまうわね」

まるで大輪の薔薇ばらを背負ったみたいに華やかな笑顔。

とりあえず、喜んでもらえて本当に良かった。この方は店長の実のお姉さんだし、店長が店を始めるときに資金のほとんどを工面したオーナーだ。たぶんこれから先もお付き合いが続くことになるから、良好な関係を築いておきたい。

……うん、店長もそれくらいはきつとわかつてくれるはず。

私が心の中で大きく頷うなずいたそのとき、花華さんが感極まった表情で振り向いた。

「じゃあ、今日は本当にありがとう！ これから店に戻るんでしょう？ 竜也によろしくね」

改札を抜けた私たちは、上りと下り、それぞれのホームへと別れる。階段を上って

たら電車がホームに入ってくる音がした。おっと、急がなくちゃ!

お団子でパンパンに膨ら^ぶれていた胃袋も、お店の最寄り駅に着く頃にはずいぶんすっきりしていた。さすが、私。あとは店長のお口チェックに備えて、駅ビルのトイレで念入りに歯を磨^{みが}けば完璧だ。

そして、いざ、氷の王国へ……!

「——あれ?」

まだ夕方の四時を回ったばかりなのに、もう表に店じまいの札が掛かっていた。

まあ、もともと気まぐれ営業だから、閉店時間もまちまちなんだけど……かき入れ時の日曜日にはちよつと早すぎないかな。クツション役になってくれると目論^{もくろみ}んでいたミズエさんも帰宅しちゃったみたい。

裏口からそつとキッチンに入ると、不機嫌な顔の店長が作業台の前で待ちかまえていた。

せつかく急いで戻ってきたんだから、もうちよつと嬉しそうにしてくれた方がいいのに。

「ずいぶんと、長く掛かったもんだな」

「ええ、まあ……いろいろと付き合ったので。でも花華さんにはとても喜んでいただけ

ましたし、よかったです」

「そうか。……まあいい、ちよつとここまで来い」

彼はいつもの命令口調で、私を手招きする。

「はーい、なんでしょう?」

洗い終わったものを乾燥機に入れろとか言うのかな。相変わらず人使いが荒いんだからなあ……なんて考えつつも素直に従うと、いきなりぎゅつと抱きしめられてしまった。

「……えっ、そのっ……」

さすがにこれは予想してなかったもので、かなり驚いた。最初はなにかの冗談かと思っただけけど、店長の腕の力は半端なく強いし、言いたいことを抑え込むような沈黙に胸が詰まりそうになる。

「てっ、店長!?!」

呼びかけてもなにも答えてくれない。ちよつと苦しすぎるんですけど!!

店長の白い仕事着はずつと冷房の中にいるせいか、とつてもひんやりしてる。

「うるさい、少し黙ってろ」

わ、容赦なく、ばつさりと言われた。

なんなんだよーって思ったものの、しばらく大人しくしているしかなさそう。そういうや、朝も普段とちよつと違う感じだったような……今頃になって、そんなことに気づい

たりする。

それから、どれくらいの時間が経過したんだろう。クーラーの吹き出し口の下で冷気に晒され続けて、そろそろ限界がきそうだった。このままだとふたりして氷漬けになっ
てしまうと、そう思い始めた頃――

「……今朝は夢見が最悪だった」

「え？」

その言葉を合図に、腕が解かれる。

「帰るぞ」

前後の言葉がまったく繋がっていないことに、当の本人は気づいているのだろうか。

店長は神業のような速さで帰り支度を終えると、私の腕を掴んだ。

「まずは風呂だ。お前、相当に臭うぞ」

「ええっ、そんな馬鹿な……!？」

そりゃ、炎天下の中を歩いてきたんだから結構汗をかいたと思う。でも、店に入る前に石けんの香りの制汗剤をシューってしたし。

どうも腑に落ちない私に、彼はさらに言う。

「お前の身体から、餅米と小豆の匂いがぶんぶん漂ってくる。いったい、今までなにを
してきたんだ。白状しろ」

「なっ、……なになっ……」

えええっ、なんで分かるのっ! 「そんなことないよう、誤解だよ、店長に内緒で美味いものなんて食べてない!」……って、はっきり言い切れないのが辛いところだけど。

「俺の鼻を侮るな。お前がなにを食ってきたかくらいすぐにわかるぞ。この浮気者め、
許さん!」

だーかーらっ!

そんな綺麗な顔をして、どうして時代劇に出てくる頭の固いおじさんみたいな台詞を言うのっ。いいじゃない、お団子の十本や二十本。……まあ、今日はそれよりもずいぶん食べた気がするけど。もうすっかり消化したよ、だから店長のケーキだって美味しく食べられるから!

……って、駄目だ。全然聞いてないし。

店長は、なにもかもがショートカットで無駄のない人間だ。

アパートに着くと、脱衣所に直行。そこであっという間に全部脱ぎ終えると、呆然としたまま立ちつくしていた私の服にも手を掛けてくる。

「ほら、早く脱げ」

「えっ、いいです！ 自分で脱ぎますから……」
 抵抗する間もなく、こっちもすっぽんぽんにされてしまった。店長は仁王立ちして、私を睨みつけている。やだもう、前くらい隠してほしい……って、店長の分身は、すでに元気になっているんですけどっ！

「ぐずぐずするな！」

そして私は、バスルームに押し込まれてしまった。後ろ手にドアを閉めた店長が背後に立つ。

すると、頭上から全開のシャワーが滝のように落ちてきた。

「まったく、油断も隙もない奴だ。美味いもんが食いたきゃ、食べばいい。だが、俺に黙ってコソコソするな。どうしても行きたい店があるなら、俺も連れていけ。それなら百歩譲って許可を出す」

「……え？」

水音にかき消されちゃいそうだったけど、なんとか彼の言葉を聞きとることができた。でも、言ってることに矛盾がありません？

「そ、それって、どういう——」

「なんだ、そんなこともわからないのか。お前は本当に馬鹿だな」

ぎゃーっ、顔面にシャワーをかけなくなっただっていいじゃない！ 息苦しくて顔をそむけ

たら、全開にしたシャワーヘッドを持って追いかけてくるし。この鬼畜っ、横暴っ！

「美味いもんを食っているときのお前の顔は俺のものだ。他の奴に不用意に見せるんじゃない」

「なっ、そんなの絶対無理に決まっているじゃないですか！」

「うるさい。とにかく、ここに座れ」

上から頭をぎゅうっつと押さえ込まれ、私はお風呂マットに座らされた。その直後、背後からぬうっつと泡だらけの大きな手が伸びてくる。

「ほら、全部綺麗に洗い流してやる。しばらく大人しくしている」

そう言われた直後、胸を覆った手のひらがもぞもぞと怪しげな動きをし始めた。膨らみを下からゆっくり持ち上げ、全体を揉みしだく。

「ああつ、……いやんっ！ なっ、なにしているんですか……！」

「むやみに動くな。手が滑るぞ」

「……はあんっ……！」

敏感な蕾を素早く摘み上げられ、私は悲鳴を上げた。これって、手が滑ったとかそういうレベルじゃないでしょう。

「ずいぶん感じているようだな。期待していたか？」

わざと耳元に息が掛かるように囁いて、彼の手は私の足の付け根へと降りてくる。そ

の指先は潤い始めた秘部にぬるりと入り込んだ。そして、わざとらしく水音を立てながら抜き差しをする。

「そ、そんなんじゃないよ……あつ、中をかき混ぜないで……!」

泡のせいで滑りの良くなった店長の手が、自由自在に私の身体を這い回る。さらに耳元に落ちる熱い吐息に、必死に繋ぎ止めようとしていた理性が崩れ始めた。

「言い訳など言う資格がお前にあるのか。まったく、ちよつと気を抜くとすぐにこれだ」
舐めるように撫でて回されて、胸もおしりもぐちゃぐちゃであわあわ。もう身体は熱く疼いている。もがいても逃れられない蟻地獄に入り込んでしまったようだ。容赦なく追いつめられていって、隠しておきたい本音までが次々に暴かれてしまう。滅茶苦茶にされちゃってもいい、こんな風に強引にされるのが好き。怖いけど……もつとほしい。

「……やつ、やあつー! そ、そんなことすると……来るつ、来ちゃう、……あああつ……!」
出入りしていた指がひときわ奥まで届くと、私の意識は一瞬で飛んだ。でもすぐに、ハッと我に返る。背中に、硬くて熱いモノがごりつと押し当てられたから。

「あ、駄目。……まだ、無理——」

……って、最後まで言い切る前に四つんばいにされちゃって、店長の方を向いている腰をぐつと掴まれた。

「お前には俺以上の男はいないということを、思い知らせてやる」

そして一気に奥まで貫かれて、全身にしびれが走った。いきなりすごいのが来たよつ。ちよつと待って。もしかして今の姿って、まさに串団子状態!? しかも店長は私の腰を持ち上げた状態で固定して、すぐに動き出す。ギリギリまで腰を引いてから、ふたたび勢いよく奥までねじり込んできた。

待って待って、こんな風にしたら、また私——

「てっ、店長っ……駄目っ、駄目だったら〜!」

バスルームの中に自分の声が響いて、それでようやく自分が呼び方を間違えたことに気づいた。

やばい、名前を呼ばないとお仕置きと称して、もつとひどくされるんだ。それで限界を越えちゃったことも二度や三度じゃない。

でも、いつもならすぐに飛んでくる突っ込みもなし。それどころじゃないって感じで、ガンガンに攻め立ててくる。深く繋がりがあうたびに私の内側から愛液が溢れ出て、太股へと流れていく。

「ほら、無駄なあがきはよせ。抵抗をやめれば、すぐに楽になるぞ」

いや、それは絶対に嘘。こうなっちゃうと、店長はどこまでも止まらないから。

「あつ、来るつ、来ちゃうつ……や、やあんつ……!」

二度目の絶頂を迎えたところで、ようやく店長の動きが止まった。彼自身がぬるりと

出て行って、私はホッと息を吐く。

でも、それも東の間の休息だった。

店長は、お風呂マットの上にへたり込んでいる私の腕を掴む。

「じゃあ、次は場所を変えるぞ。ここだと、滑って動きにくいからな」

「ええっ、今日はもう無理……」

「なにを言う。俺を満足させなければ褒美は出さないぞ。見ろ、まだこんなだ」

うっ、嘘っっ！ さっきよりも、さらに店長自身が大きくなっているような……

「あまり文句を言うなら、ここでもう一発お見舞いしてもいいんだぞ」

「やっ、それだけは許して！ 無理っ、今すぐになんて本当に無理です……！」

「なら、大人しくベッドまで移動しろ。……どうした、立てないなら担いでいくか」

ううう、不覚。

どうにか自力で動きたいのに、足腰がまったく言うことをきかない。でも、ここで店長の手を借りたら、また好き勝手に触られまくる。少しの間でも休憩しないと、身がもたないもの。

そりゃあね、えっちなことは嫌いじゃないけどモノには限度というものがある。

「じっ、自分で歩けます！」

「そうか、それならすぐに来い」

窓の外は相変わらず灼熱地獄。それでも、空の色だけは一足早く秋の色に変わり始めていた。芸術にスポーツ、そして食欲の秋にふさわしい夢の時間がすぐそこまで来ている。

でも、今年はその先にとんでもない「事件」が待ちかまえていることに、私も店長もまだ気づいていなかった。

第一章 スイーツな依頼は嵐の予感

1

朝、猛烈におなかが空いて目覚めるのが私の二十年來の日常。

どうして、布団で横になっていてはただけなのにエネルギーを消費するんだろう。未だにそれがすごく謎なんだけど、それを解明するよりも今の空きつ腹をどうにかするのが先だ。

そんなわけで、私は勝手知ったる他人の家といった様子で台所に立っている。

週の半分は彼の部屋に泊まっている。南向きで日当たりが良すぎるアパートも、秋が深まるにつれて居心地が良くなってきた。朝起きて、窓をがらがら開けたら涼しい風が入る生活って、やっぱりいい。

そんなことを考えつつ、お味噌汁用の大根をトントンと切っていたら、奥の部屋でごろりと寝返りを打つ気配がした。この部屋の住人も、今朝は少しお寝坊だったりする。

私がベッドを出たときはまだ夢の中にどっぴりいた。

「たまには、こんなゆったりした朝もいいよな〜」

今日は月曜日。彼の店である『Petis Point』は、臨時休業をしている。なんでも、店の真ん前の道路でガスパの点検作業が行われるのだとか。かなり大がかりなものになるらしく、明日の定休日と合わせて二連休にしたというわけ。

でも店が休みだからって、店長にはそんなのまったく関係ない。一に仕事で二に仕事、三四がなくて五に仕事ってタイプだから、これ幸いとばかりにキッチンに籠もりきりで過ごすんだろう。

十月も半ばになった今は、クリスマスケーキの試作も大詰め。私も試食やデコレーションの助言をするのに大忙しだ。美大で培ったセンスと、美味しいものを求めて西へ東へ奔走した豊富な経験を生かすことができている。最近、結構頼りにされてたりするんだよ。

去年のクリスマスには、まだ店長にも彼が創り出す究極のケーキにも出会っていなかった。だから、今回の作業はなにかもが初めての経験で、楽しくて仕方ない。

研究熱心な店長はより完璧な味に仕上げるために、毎日のように試行錯誤を重ねたホールケーキを作っている。多いときには一日に二個も三個も。それがほとんどすべて、私の胃に収まっていた。

うちのショップは個人経営の小さな店だから、クリスマスケーキの予約もチェーン店に比べれば微々たるもの。それでも、ホールケーキが一度に何十個も売れば大きな収入になることには変わりないのだ。そのためにできることなら、なんでもやりましよう！……というのも、実は店の業務用オーブンの調子がかかり悪くて、できるだけ早い時期に買い替えたいと考えている。何度も修理をしてどうにか使っていたけれど、もともと中古品だったこともあり、そろそろ限界っぽい。他の調理器具もあちこち小さな不具合があったりして、とにかく先立つものがほしい今日この頃だ。

近頃は経理のほとんどを任せられるようになったので、店の台所事情にもかなり詳しくなっている。正直、あまり楽観はできない状態だ。ちよつとでも利益を多くしたいとあれこれ節約したものの、できることはやり尽くしてしまった。

店長はお店の規模を今よりも大きくしようとか売り上げを伸ばそうとか、そういう欲がまったくない人間だ。ケーキ作りを思うまま続けられるなら、それで充分と考えているみたい。

でもなー、それだと私としてはちよつと物足りないかも。

だって、店長のケーキは天下一品なんだから。その素晴らしさをもつともつとたくさんの人に知ってほしいし、思う存分味わってもらいたい。でも、ケーキ作りを一から十まで店長ひとりで行っている現状では、それも無理だろう。

もちろん、何度か提案したんだよ。あとひとりかふたり、パティシエを雇わないかって。だけど、とりつく島もなく即答で却下。キッチンに他人を入れたら余計な気苦労が増えるだけなんだって。

「まあ、難しいことはあとでいいや。まずは腹ごしらえからね」

よし、お味噌汁も完成。卵焼きに鮭さけの照り焼き。トマトとタマネギのサラダ、キュウリの浅漬け。今日は和風っぽくしてみた。サラダは鰹節かつおがしとポン酢でいただくんだよ。

なかなか上手にできたじゃない、自分。私のお皿がどれもかなり大盛りになっている以外は、素敵な新婚さんの朝ご飯そのものだ。

「まだ店長も起きてこないし……それじゃここはひとつ、デザートでも追加しようかな？」

最近、自宅でよくチョコレートプリンを作っている。材料の分量を変えながら何度か作ったら、かなり満足のいくものになった。そろそろ店長にも試食してほしいな。本職相手にちよつと無謀だけど、貴重なアドバイスをくれるかもしれないし。ポウルに卵を割り入れながら、思わずにやけてしまう。

「えへへ、美味しすぎてびっくりされちゃったらどうしよう！」

「……誰をびっくりさせるって？」

五個目の卵を手にしたところで、驚くほど近くで声が出た。

「なんだ、まだ品数を増やす気か。相変わらず、底なし沼の胃袋だな」
 いつの間に起きてきたの!? でもって、いきなり声を掛けないでよ。心臓が止まり
 そうになったじゃない。

「ちっ、違います。これはデザートプリンですから！」
 「プリン？」

彼はそう聞き返しながら、私の両腕を後ろからがちりと掴んだ。

「それなら俺が作る。ポウルをこっちによこせ」

あつという間に、卵の入ったポウルを奪い取られる。

「えっ、えーっ！ 待ってくださいって。たまには私に作らせてくれたっていいじゃないですか！」

「いや、菓子なら俺が作った方が絶対に美味しい」

「そんなの、わかってますけど！」

なんて押し問答をしているうちに、あつという間にチョコレート入りの卵液らんえきが完成してしまった。それを店長は、私がかかじめ準備していたココット型に、静かに注ぎ込む。
 「俺のお株を奪うなんて、百年早いぞ」

「で、でも……」

この部屋で過ごすとき、食事の支度は私が担当している。だけど、彼はお菓子だけは

絶対に自分が作ると言って譲らない。実のところ、私はそのことがかなり不服だったりする。

「そりゃあ、店長が作った方が美味しいのは当然ですよ。でも、私だってたまには自分で作りたいんです。それに、人がやってるのを無理矢理奪い取らなくたって——」

「文句は食ってから言え」

駄目だ、完全に会話が食い違っている。こっちの言い分が少しも通っていない。

「練習しなかったら、いつまで経っても上手にならないじゃないですか」

「お前は、俺の作るケーキを食べていればそれでいい。余計なことを考えるな」

ううう、なんて横暴。

「だって、私は——」

他の人を雇うのが嫌なら、私に手伝わせてよ。今は全然駄目だけど、きちんと教えてもらえれば少しは力になれるはず。でも、店長はそんなこと考えもしないみたい。

店長はオーブンの扉をボタンと閉めると、こちらに向き直る。

「朝から元気があり余っているみたいだな。プリンが出来上がるまで一汗流すか？」

なんなの、どうしてそういう流れになっちゃうの。簡単に話をすり替えないでほしい。「なに言ってるんですか！ 今日午前中会社に呼び出されてるって言ったでしょう。

あと一時間で出掛けないと間に合いませんから」

いきなりの提案に、私は身体の前で大きくバツを作って拒否する。

「急げば二十分で終わるぞ」

「いいえっ、朝ご飯をきっちり食べないと途中で倒れてしまいます！」

「じゃあ、食いながらでもいいぞ。お前くらい口が達者なら、それも可能だろう」

あつという間に後ろから抱きつかれて、首すじに吐息がかかる。その一方で、彼の片手は当然のようにスカートの中。うそ、もうパンツに手が掛かっているよ！

「やんっ！ て、店長だって、やりかけの仕事があるでしょう。今日は早めに店に行くって言っていましたよね！」

私の質問に店長は答ええない。

強引にブラがずらされ、胸の先を摘み上げられる。ピンポイントの刺激に、おなかの奥がきゅーっと収縮した。

「だ、駄目っ……服がシワになっちゃう！ せっかく着替えたのに——」

「ずいぶんと偉そうな口をきくようになったな。……じゃあ、こっちはどうだ」

パンツの脇から忍び込んだ指が、敏感な襞をいじり始める。最初は入り口を何度か突いて、そのうちずるりと中に入り込んできた。

「あつ、あん！ や、そこはっ！ ああっ……ああっ——」

突然の刺激に耐えられず、私はシンクに背中を押し当てたまま、軽く果ててしまった。

すると店長は、何事もなかったかのようにさっと身体を引いた。

「生意気な女には仕置きを与えなくてはな。……さて、そろそろ飯にするか」

え？ ここでおしまい？

そのまま、へなへなとキッチンマットの上に膝から崩れ落ちる私を振り返りもせず、彼はさっさとテーブルに着いた。すると、タイミンク良くテーブルの上にある携帯が鳴り出す。

「——もしもし？」

椅子から立ち上がり、店長が電話に出る。こんな朝早くから電話なんて珍しい。いたい相手は誰だろう。

「……はい、その件については——え？ それは……まだ検討中で。そうですね、もう少しお時間をいただかないと……ええ、その際はこちらからご連絡します」

そのまま携帯を片手に奥の部屋へ歩いていってしまうので、会話は途切れ途切れにしか聞こえなくなる。いつまで続くのかなと覗いてみたら、しっしと追い払われてしまった。

「店長、誰からの電話ですか？」

少し浮かぬ顔をしながら戻ってくる店長を見て、思わず訊ねてしまった。でも、彼は面倒くさそうに言い捨てる。

「お前には関係のないことだ」

「えっ」

「ほら、早く飯を食わないと遅れるぞ。そろそろ、プリンも出来る頃だ。それもきちんと食ってから行け」

そんなこと、言われなくなってますけど。

でも、なんだろ。店長の態度がおかしいような……やっぱ、さっきの電話が気になっちゃうな。

私の視線を完全無視して、目の前に座る店長は大口でご飯をかき込んでいた。

ホームページの書き換え作業は、昼前には終了した。予定どおりに退社できてホッと一息吐く。これで、午後からは店に出るといふ店長との約束も守れる。

この頃の彼はちよつと変。やたらと束縛してくると思つたら、今朝のように急に突き放したりするんだから。私に隠れてコンコンと電話をしていることも多いし。

まさか……借金取りからの催促とか？ 中途半端な隠し事をされると、余計気になっちゃうじゃない。どんどん悪い方に考えてしまつて、頭がごちゃごちゃになつてくる。これも全部、店長のせいだ。

「あーもうっ！ 考えるのやめやめっ」

気持ちを着ち着かせるために大きく一度深呼吸。

そんな風にしてたら、雑居ビルを出たところでいきなり携帯が鳴った。

「あれ、誰だろ？」

私はバッグを持ち直してから、通話ボタンを押す。

「……もしもし？」

『はぁい、結衣さん！ 今、電話しても大丈夫かしら？ 確か、今日は如月企画に出社だったわよね』

着信音を聞いたときから、嫌な予感はしたんだよね。なんか、少し前にも同じようなことがあったなとか。

——やっぱり、「あの」お姉様だ。

「こ、こんにちは、花華さん。ええ、そちらの仕事は終わったので、今は平気ですけど」

『良かったわ！ ねえ、結衣さん。これから、ちよつと時間取れる？』
うわっ、またもいきなりお誘い？ こちらの都合を聞いてくれているけど、断らせまいとする威圧感がびんびん伝わってくる。

「ええと……すみません。これから、お店の方に行く約束をしているので」

『あら、そうだったの』

電話越しにでも、今、花華さんがドングリみたいに大きな目をくりくりさせてるだろうことがわかった。だけど、ここで一歩も引かないのが花華さんなのだ。

『それなら大丈夫、私から竜也に連絡しておくわ。じゃあ、これからメールで地図を送るから、その場所に二時に来てちょうだい』

「えっ、ちょっと、待ってくだ——」

……駄目だ、もう切れてるし。

「も、勘弁してよう」

電話に文句を言ったところで始まらない。ゴーイング・マイウェイな性格は姉弟共通、特に姉の花華さんの仕切りには逆らえない圧倒的な力を感じる。あれに対抗できる人がいるとしたら、是非ともお目に掛かりたいものだ。

「あーあ、これでまた、店長の機嫌が悪くなるんだよなあ……」

彼も花華さんには簡単に押し切られる。しかも、そこで溜まった鬱憤はすべて私に降りかかってくるんだよね。お願いだから、姉弟喧嘩に他人を巻き込まないでほしい。

——と思つてたら、早速メールが届いた。添付された画像を見て、私はふと気づく。

「……あれ、こっつて」

この前、花華さんに連れて行かれた「早食い大会」の会場への最寄り駅じゃない。どうして、こんな場所まで呼び出すんだらう。

「結衣さーん、こっちょよ、こっちょ！」

いつもどおり、派手なスタイルの花華さんが、手を振っている。今日はくすんだブルーの生地に白い薔薇をたっぷり散らしたワンピース。そして、フリルがいっぱい付いたデニムの上着を重ね着している。もちろん、ワンピースの下にはレースのブラウスと長いペチコート。首に巻いたシヨールも薔薇柄だ。

その服装に戸惑いつつ、待ち合わせのビルの前にいる花華さんのもとへ駆け寄る。

「お待たせしました。今日はどんなご用件ですか？」

まさか、また「早食い大会」に出てくれと言うんじゃないだろうな。それだったら先に言つてほしい。

「ええ、実はね——」

花華さんが話し出したとき、建物の中からスーツ姿の女性が出てきた。

す、すごい美人。まるでフランス人形のように整った顔立ちに思わず魅せられてしまう。……あれ、でもこの人って、見覚えがあるような。

そう思っていたら、その女性が近づいてきて口を開いた。

「こんにちは、田村さん。その節はどうも。——私のことを覚えてますか？」

「え、ええと……」

うん、絶対に出会ったことがある。それも、つい最近に。

そう思うんだけど、もうちょっとのところで思い出せない。焦る私に、目の前の女性

はにっこり笑って言った。

「先月この商店街の企画で、優勝の賞品をあなたにお渡ししたの、私ですよ」

「ああ、そうでした！」

ぽんと手を打ったところで、ささっと名刺が差し出される。

「ご挨拶が遅れて申し訳ございません。わたくし、巡田めぐりたと申します。ここ一帯は野木山のぎやま駅前商店街というのですが、その商工会会長をしております」

「は、はあ」

か、会長さん？ それって、すごく偉い人だよな。どう見たって、まだアラサーって感じなのに……。しかも名刺には、MGビルオーナーてって書いてある。うわわ、MGビルてって目の前にある、この馬鹿でっかいビルじゃない!?

私は、話がまったく見えずに呆然とするばかり。そんな私に巡田さんは大輪の花のような笑みを向ける。ちなみに、下の名前は「ぼたん」さんと言うらしい。派手な名前もここまで華やかな外見だと、イメージにぴったりで「さすが！」と思える。

「本日は突然お呼び立てしてしまい、大変申し訳ありません。まずは中へ……そこで詳しくお話ししましょう」

麗うるわしきビルオーナーに案内されて向かった先は、エントランスを入った奥にある応接室だった。

ソファに座るとすぐに薫かほり高い緑茶と和菓子が運ばれてくる。……わあ、これって、早食い大会の会場だった和菓子屋さんの商品だよな？ 今日のは三色団子とは違うお菓子だけど、淡あわくて優しい色合いとか温かみのあるかたちとか、なんとなく雰囲気かわかる。「それでは改めまして。田村さん、本日はわざわざお越しいただき、誠にありがとうございます」

「あ、いえ……その」

ローズピンクのスーツに包まれたスタイルの良いボディに、タイトスカートの裾から伸びたすわりと細い足。ぱっちりメイクにすっきりとまとめられたヘア。余裕の微笑みを浮かべた口元が、いかにもデキる女性という感じだ。

なんか、自分がすごい場違いな気がするんですけど。今日の私、仕事帰りとはいいえ学生並みにラフな服装だし。この格好で面接に行ったら、ドアを開けたところで即刻不採用になりそうだ。

「あらあら、そんなに硬くならなくていいんですよ。どうぞ、楽になさってくださいね」綺麗に整えられた爪には、絶対にプロの仕事と思えるネイル。スーツの袖口からちらっと覗く華奢なプレスレット。目の前に座っている若きオーナーの姿に、いちいち釘付けになってしまふ私がいる。

「先日のイベントでは、本当にお世話になりました。田村さんのご活躍で、我が商店街

の知名度はますます上がりました。その宣伝効果は素晴らしいものがあり、こちらも大満足です」

そこで巡田さんは、ちらっと花華さんの方を見る。

「それに……お陰で花華さんとも知り合うことができましたし。今では、公私ともに仲良くさせていただいています。これもすべて、田村さんが取り持ってくれたご縁です」

その言葉に、私よりも早く花華さんが反応する。

「いいえ、こちらこそ！ ぼたんさんやお母様とお知り合いになって、本当に嬉しいです。もう、ご自宅のお隣に引越してしまいたいくらいですよ」

そういえば、先日イベント会場では、ガールズトークに花が咲いていたような。

今日の服装を見てもわかるとおり、花華さんはレースやフリルに派手な花柄のワンピースやベスト、ブラウスなどを何枚も重ね着した某ブランドの大ファン。

そして、会場で受付をしていた女性、おそらく巡田さんのお母様も花華さんに負けず劣らずのファッションで、ふたりはあつという間に意気投合していた。そうか、あれがきっかけでお付き合いが続いているんだね。

「ふふ、それはとても光栄ですわ。これからもどうぞよろしくお願いします」

大人の微笑みを見つめながら、ふと思う。もしかして……もしかしなくても、巡田さんもプライベートではあのような服装を？ うーん、すぐには想像できないけど、ばつ

ちり着込んだら結構似合いそうな気がする。

「それはそうと、田村さん」

話がどんどん脱線していきそうになったところで、巡田さんはふつと方向修正をしてきた。彼女は、慣れた手つきでサイドテーブルに置かれていたファイルを広げた。

「実は、これから年末に向けて、我が商店街をますます盛り上げるために新しい企画を立ち上げることにしたんです。今回の話の発案者は花華さんなんですが、本当に素晴らしい内容で感激しました」

差し出されたページには、『和洋スイーツ☆イケメンパティシエが集う夢の競演』という文字が大きく記されていた。開催日時は今月末の土曜日と書かれている。

「ええと、これって」

そういえば、花華さんつて、フリーでイベント企画の仕事をやっていたんだった。最初は可愛い服が大好きな有閑マダムかと思ってただけど、趣味に使うためのお金は自分で稼いでいるらしい。独身時代はその道ではかなりのすご腕だったっていうから驚きだ。

——でも、イケメンパティシエって……

その言葉にすぐ引っかけりつつ、私はページをめくる。

見開きには、四人の職人らしき人物の顔写真とプロフィールが載っていた。一番最初

に紹介されているのが、先日の三色団子を作った『楽々亭』の店長。……って、巡田大^だ吉!^{きち}!

「あら、もう見つかってしまいました？ 実は彼、わたくしのダーリンなの。なかなかイイ男でしょう。仕事もできるし、すっごく優しくて」

いきなり頬を染めて身体をよじる巡田さんにびっくり。

そ、そうでしたか。先日のイベントも商店街の活性化とか銘打って、ちゃっかり自分ちのお店も宣伝していたってことね。まあ確かに、憎めない感じの優しそうなイケメンさんだ。

やがて彼女はハッと我に返って姿勢を正した。

「次の田端正和^{たはたまたまきかず}さんもご存じよね？ 国内外の数々のコンクールで優勝して、今やテレビに雑誌に引っ張りだこの超人気者ですので」

「はいっ、もちろん！ 本店にも、都内や横浜にある支店にも何回も行ってます。ちょっとお高いですけど、アフタヌーンティーのコースが絶品で！ あああ、また行きたくなくなりました……」

「ふふふ、さすが田村さん。よくご存じね、やはりあなたに声を掛けて大正解だったわ」
巡田さんはニコニコと特上の笑みを浮かべている。

「今回は初めての試みなので、とりあえず参加者は四名に絞^{しぼ}らせてもらったの。人数は

少なめかもしれないけど、事前の宣伝も大々的に行うし、地元のカープルテレビでは期間限定でコマーションシャルも流してもらう予定。我が商店街は都心からは少し離れているけど、交通の便は良いので、目玉の企画を用意して売り込めば、かなりの集客が期待できるわ」

「はあ……」

その道のプロである特別審査員に加えて一般審査員二百人による試食審査もあるらしい。スケールが大きくてなかなかすごそう。そういうえば、以前どこかのテレビでそういう企画があったなあ。

「それでね、前回優勝者の田村さんには、このイベントの特別審査員のひとりになってほしいの」

「ええっ、私が!？」

なんで、そんな展開になっちゃうの?!

だって、見てよ。その他の特別審査員っていうのが、ものすごいメンバーなんだよ。

グルメ雑誌の編集長に製菓専門学校の学長、さらにスイーツ好きで知られているお笑いタレントまで、そうそうたる顔ぶれが並んでいる。

「そんなに驚くことでもないわ。なんと言っても前回のイベントでは他の参加者に大差をつけての優勝ですもの。あなた以上の適役はいないと思って、こうしてお願いでいい

るのよ。花華さんに聞いたわ。田村さんは、本当に美味しいものを見極めることができる黄金の舌の持ち主なんですってね」

「そ、そこまでのものでも……」

花華さん、すぐく話を盛りすぎだよ。私、ただの素人ちやうとなんですけどっ！　こんな有名人の中に交ざって審査員なんて、場違いも甚はなはだしいと思う。

まあ、この前の三色団子は本当に美味しかったし、田端正和の創作ケーキを味見できるなんてまたとないチャンスなので、やってみたい気持ちはあるけれど。

うろたえる私を見て、巡田さんはさらに続ける。

「もちろん、規定の謝礼はお支払いするつもりよ。いかがかしら？　もしかして、この日程だとご都合が悪い？」

「いえ、そういうわけじゃないんですが——」

戸惑いながらも、私は「謝礼」という言葉に思い切り反応していた。今は喉のどから手が出るくらいほしい現金収入だ。ほんの数時間ステージに座っているだけでいただけるんなら、こんな嬉しいことはない。

どうしよう。イベント当日は土曜日だけど、店長を上手くごまかせるかな……。だって正直に理由を言ったら、絶対について来そうなもの。仏頂面ぶつどうめんで背後に立たれたら、周りの人が驚くよ。

「……あ、失礼」

巡田さんの携帯が突然鳴り出した。席を離れてから話し始めていたけど、なんだかトラブっている感じ。短いやりとりのあと電話を終えた彼女は、私たちの方へとすまなそうな顔で向き直る。

「ごめんさい。話が途中になってしまったけど、これから急いで向かわなくてはならない用事ができてしまったの。田村さん、悪いけれど詳しい話は花華さんから聞いてくれる？　では、私はこれで」

結局、彼女の口から説明を聞いたのは十分程度。話の内容がよく呑み込めないうちに、いなくなってしまった。

応接室には私と花華さん、そして食べかけのお茶菓子が残される。

先ほどのプロフィールのページが開かれたファイルも、テーブルの上に置き去りにされたままだ。手もちぶさたなこともあって、それをパラパラめくっていた私の手がぴたりと止まる。私が指さしたのはもちろん、一番最後の参加者だった。

「あの、これってどういうことでしょうか、花華さん？」

——そう。花華さんは、参加メンバーの最後にちゃっかり自分の実の弟である店長、つまりパティシエ・神崎竜也をエントリーしていたのだ。これにはさすがの私もびっくり。「ふふーん、わかった？　私としても、この企画は絶対に成功させたいの。他の三名は

すでに参加を了承済み。初回にしてはなかなかのメンツをそろえたと思うわ。巡田オーナーのご主人もね、関西での修業時代からかなりの有名人だったらしいのよ。決して、身内輩びいばいじゃなくて、ご主人の名前だけでも十分集客が見込めるわ」

「でも、どうして、このメンバーの中にいきなり店長が入るんですか？」

あまりのことに冷や汗だらだら私に対し、花華さんは落ち着き払っている。

「あら、結衣さん。あなたいつも言ってるでしょう、竜也のケーキは世界で一番だって。だったら、それをこの機会に大々的にアピールしましょうよ。いつまでも街の小さなケーキ屋さんでくすぶっていても駄目。あの子にはもつともつと大きなステージに立つてもらわなくちゃ」

もちろん、花華さんの言うとおり、店長のケーキはどれも美味しくて、有名店にも決して引けを取らないと思う。

でも店長は、メディアへの露出を極端に嫌う。しかも店の営業時間もすごく気まぐれで、それなりに収益は上がっているものの、有名店への道となる支店展開なんて夢のまた夢だ。なにしろ、従業員を増やそうという気持ちすらないんだから。

「まあ、確かに店長はすご腕のパティシエですもんね」

花華さんのことだ、店長だってあつという間に説得してしまうんだろう。彼は、どうしようもない俺様で自分が進みたい方向に勝手に歩いていくタイプだけど、お姉さんに

は絶対に頭が上がらないんだよな。

いいのかな、本当に。知名度がある参加者に店長が交ざっちゃっても。私はまだ不安で仕方ない。でも花華さんの言うとおり、これはまたとないチャンスかも。店長が首を縦に振ってくればの話だけど。

「それにしても、新作創作スイーツですか……今はクリスマスケーキの試作で大変なので、そこまで手が回るんでしょうか」

店長が参加するなら、私も味見やデコレーションにがつつり協力しなくちゃ。これは責任重大だ。

「そのことなんだけど……結衣さん」

花華さんは急に声を潜めて、私の耳元で囁く。

「はい？」

「今回のイベントを成功させるために、あなたにはどうしてもクリアしてもらわなくちゃならないことがあるの」

彼女の口から語られたのは、私にとって限りなく複雑な条件だった。

電車を乗り継いで、ようやく『Petits fours』に到着した。今日は臨時休業なので、表通りに面した窓ガラスには内側からロールカーテンが掛かっている。

私は裏口に回ると、ドアレバーに手を掛けた。すると、奥からなにやら怒鳴り声が聞こえてきた。

「だから、そのことは改めて連絡するとお伝えしたはずでしょう。何度も同じことを言わせないで下さい……え、時間が無い？ そんなこと、こつちも同じですよ！」

なっ、なに!? いきなり驚くじゃない。

私は心臓をバクバクさせながら、ドアを挟んで中の様子を窺った。最初はお客さんが来ているのかと思ったけど、話し声は店長のものだけ。どうも誰かと電話をしているみたいだ。

——まさか、朝の電話の続きとか？ 面倒なことに巻き込まれているんじゃないでしょうね。

その場に立ち尽くしていると、やがて話し声が聞こえなくなる。電話が終わったよう

だ。私は一呼吸を置いてから、思い切り笑顔を作ってドアを開けた。

「こんにちはー、遅くなりました！」

「——遅い」

いつもと同じく、仏頂面ぶつちやうめんのまま仁王立ちにおうだちしている、パティシエ姿の店長。長い帽子に白い仕事着がぱっちり決まっている。彼は大きなボウルを抱えて、まるでそれが親の敵かたみでもあるかのように怒りまかせに泡立て器を打ちつけていた。直前まで言い争うほどの電話をしていたとはとても思えない。ずっとその作業をしていたように見えるけど、これって、もしかしてカムフラージュ？

「まったく、今までどこでなにをやっていたんだ」

機嫌悪さマックスであることは明らか。でも、これくらいは想定内だから、私は慌てたりしない。

いつものようにカウンター裏の戸棚にバッグを置いて、上着を脱ぎながらロッカーを開ける。

「えっと、花華さんから連絡来てますよね？」

「それがなんだ。お前の仕事が溜まっていることには変わらないぞ」

「はい、それはこれから片付けます」

店長は威圧的な言葉だけには留まらず、身体じゅうから負のオーラおんらが滲み出してきて

る。多少会話がすれ違っている気もするけど、いちいち突っかかっていると先に進まないんだもの。ここは言い訳とか一切せず、素直に頭を下げるに限る。

店長は私にチラツと冷たい視線を投げたあと、また生クリームと格闘し始めた。

いきなりの放置だけど、これもいつものこと。私は気にすることもなく、店長曰く「お前の仕事」をざっと確認して、優先順位をつけた。

「さて、まずは伝票の打ち込みからかな」

近頃では接客や店内の整備に加えて、経営の方にも少しずつ関わっているのは前にも話したとおり。というか、今まで店長が「嫌だけど仕方ないからやってた」ことをこっちに丸投げしてきただけなんだけどね。

納品や支払いの伝票は専用の経理ソフトを使ってパソコンに打ち込んでいくんだけど、これを溜めちゃうとかなり厄介になる。でも、経営上一番大切な部分だし、手を抜くわけにはいかない。

個人経営のショップって、なにからなにまで自分たちでこなさなくちゃならないから大変だなと思う。これが大手チェーン店だったら、本部の経理部門が金銭関係を一括管理してくれるのに。そのぶんいろいろ融通が利くというのも事実だけどね。

「結衣」

不意に名前を呼ばれて顔を上げると、店長がボウルを調理台の上に置いたところ

だった。

「その作業は一時間も掛からないだろう。終わったら、クリスマスケーキの試食が待っているぞ。今日は三種類作ったから、きちんとレポートしろ」

ようやく生クリームが泡立ったらしい。店長はオーブンで焼いた板状のスポンジを取り出すと、まずその上に砂糖を香料と共に煮溶かしたシロップを塗る。そして、さらにふわふわの生クリームを塗り広げていった。

いつもながら、鮮やかな手付きだ。無駄な動きはまったくなく、見ていて惚れ惚れしちゃう。

そうか、これはロールケーキだね。真っ白に塗られたクリームの上には色とりどりのフルーツがちりばめられていく。なんで同じフルーツが一カ所に偏ったりしないで、あんなに均等に配置できるんだらう。すごいなあ、ホントに。

店長のロールケーキは、とにかくふわふわでとろけるような舌触りがする。ショートケーキの生地とは分量が違うらしい。プロだから当然なのかもしれないけど、店長のケーキって食べるごとに新しい感動を運んできてくれるんだ。

私はこれから先も、店長自身ともこの店ともじっくり関わっていきたいと思ってる。店長に会えなくなるのも、店長のケーキが食べられなくなるのも、絶対に嫌だ。なんていったって、私たちは今や「運命共同体」なんだから。店長のケーキが私の心とおなか

を満たしてくれて、私のアイデアとアドバイスでそのケーキがさらにグレードアップする。今のままでも充分楽しいけど、さらに大きな夢を掴み取れたら最高だ。

——そのためには、やっぱり今回の話を成功させることが不可欠になってくるんだらうな。

『今回のイベントを成功させるために、あなたにはどうしてもクリアしてもらわなくてはならないことがあるの』

花華さんの出してきた条件は、こうだ。

前回イベントの優勝者である私は、四人の洋菓子・和菓子職人による新作スイーツを評価する審査員のひとり選ばれた。だが、店長の店でアルバイトしているということがどうしてもネックになる。もちろん公平な目で審査をするつもりだけど、相手を知っているか知らないかということで、無意識に最良（ひい）してしまいうこともあり得る。他の参加者の心証だつて良くないだろう。

そこで、だ。幸いにも私が勤める如月企画では、タウン誌の編集を請け負っている。花華さんが友人でもある社長に相談して、今回のイベントの特集記事を組むことになった。私はその取材もかねて各店舗に足を運ぶ。もちろんそのことも、すでに参加者には通達済み。しかも、私が前回の早食い大会の優勝者であることも、本当に美味しいものじゃないと胃が受け付けられないということも先方は承知している。その状態での取

材？ ……うわわっ、行く先々で試食責めになったりして。それはそれで嬉しいけど。

これからイベント当日までの間に他の三軒の店に直接出向いて取材をしながら、参加者ひとりひとりの普段の仕事ぶりも見ろ。

具体的には十二日後に控えたその日まで、数日ずつ終日取材しなければならぬという。定休日なども考慮すると、一店舗につき二〜三日つて計算になるのかな？

まあ、それについてはこれから先方と打ち合わせることになるんだらうけど。さらにその間、公平を期することもあり極力店長との接触を避けてほしいとのこと。店長の普段の様子はすでによく知っているので、もちろん今回は取材の時間を割かない。

ちょっと、そんな急に……と思わないでもない。

そもそもイベント参加者のひとりに選ばれているという事実を、今日の前にいる店長は未だに知らないわけだし。いきなり半月で新作を完成させるなんて、本当にできるのだろうか。

……まあ、花華さんのことだから、勝機はあるって思っているんだらうけどね。

さらに『もちろん、審査員の謝礼とは別に取材費をお支払いするわ。多少色をつけてもいいわよ』なんて、思い切り痛いところを突いてくるし……

それで、ついついOKしちゃったってわけ。あー、ちょっと早まったかな？ しかも、明日からお店を休むことを話そうと思ったら、今日に限って店長はものすごく低気圧。

乱気流の上雷雲まで発生しそうな有様で、どうやって切り出したらいいものか、悩む悩む。そんな私の様子に気づくことなく店長はロールケーキを巻き終えると、それを丁寧にパラフィン紙で包んでいた。その状態で冷蔵庫で一晩寝かせると、ちょうどいいしつとり感が出るのだとか。

「そろそろ、試食の準備をするぞ」

「あ、はい。わかりました」

まだ、ヘソを曲げているのだろうか。店長はこっちを見ずに言う。せつかちだなあと思うけど、店長にもいろんな段取りがあるんだろうし、ここは大人しく従っておこう。

私はそれまでの作業を保存すると、パソコンを閉じた。

この店では、毎年二種類のクリスマスケーキを予約販売している。ひとつはお馴染みの苺が載った生クリームベースのもので、もうひとつはしつとりどっしりとしたガトーショコラだ。どちらも大人気で、予約を開始すると数日で予定販売数に達してしまうらしい。

そういえばこの間、気の早いお客から「今年はいつから？」と訊ねられたっけ。やっぱり、クリスマスってケーキショップにとって一番のかき入れ時になるんだなど実感した。ケーキの他にも日持ちするパウンドケーキや焼き菓子、それにスパイスを利かせたア

イシングクッキーも作るって話。去年の画像を見せてもらったけど、どれもすごく可愛かった。

「こっちが生クリームベースのものだ。右と左で中に挟んだストロベリークリームの分量を変えてある。ガトーショコラはお前の意見を聞いて、ギリギリまでチョコレートの分量を増やしてみたぞ」

お菓子は小数点以下まで分量を正確に計って作られる。甘くしたいなら砂糖を大量に投入すればいいというわけでもないのが難しい。「調理」というより「実験」に近いかもしれない。それぞれの材料の絶妙なバランスに加えて、パティシエ独自の長年の勘とひらめきで化学反応が起こる……大袈裟な話じゃなくて、本当にそうだと思う今日この頃だ。

「あ、こっちの方が酸っぱい」

さっそくストロベリークリームを使ったケーキを試食すると、舌に感じる酸味がほどよいインパクトになっていた。スポンジに塗られた濃厚な生クリームの下からいきなり現れたピンクのクリームが食欲をそそる。生のイチゴを使っていることは、ときどき舌に感じるツブツブでわかった。

「それくらいわかって当然だ。だが、重要なのは全体の味のバランスだからな。このケーキの主役は言うまでもなく上に載った苺だ。脇役のストロベリークリームが目立ちすぎると、すべてが台無しになる」

そこまでわかっているんなら、店長ひとりでも判断がつきそうだけど。

まあ、そこを突っ込んだら、試食の機会がなくなっちゃうしね。ここは言われたとおりにしないと。舌先にすべての神経を行き渡らせて、ゆる〜っくり味わって……

「いつまでがついついてるんだ。さあ、どっちがいいのか、さっさと答えろ」

「えーっ、そんなにせつつかないでくださいって」

「うるさい、お前に文句など言う資格はない」

「ちよっとっ！ 今必死に考えてるんですから、そっちこそ黙っててください」

ちよっと大人げなかったけど、フォークを握りしめたまま思わず叫んじゃったよ。

でもさー、これでも恋人同士の会話なんだよな。まあいいや、もう一口いたたこう。

「——いつからそんな、生意気な口を叩くようになったんだ」

あれ、ちよっと待って。なんか急に、声色こゝろごゑが変わったような気がするんですけど——

「なっ、ななな……なんですすかっ!？」

「結衣、お前今日はなんだか態度がおかしいぞ。俺になにか隠しているんだろう?」

うわっ、急に顔を近づけないですよ。いつの間にこんなそばまで来てたの? 綺麗な顔で凄まれるすごと、マジで怖いんだけどっ!

「さては……また浮気したな?」

「へ?」

「俺に内緒でなにか食いに行っただろう? ああ、そうに違いない。まったく、油断

も隙もない奴だ」

また、始まった。最近はコレばっか。口を開けば「浮気、浮気」と、うるさいのなんのって。

「違います。今日は昼ご飯のあと、なにも食べてませんよ!」

「本当か? だが信じられん。ボディチェックしていいな?」

店長は私の顎に手を添えると、素早くキスした。

「……今日は無罪らしいな」

だから、少しは人の言うことを素直に信じなさいって!

こんな相手じゃ、花華さんとの約束をばらすわけにはいかないよ。そんなことしたら、また浮気だとか騒いでイベントの参加自体を断っちゃいそう。それは、絶対に阻止しなくちゃ。

数時間後。

私たちはキングサイズのベッドに並んで横になっていた。ここは店長の借りているアパートの一室で、ふたりとも裸で……ようするに、一度お手合わせをしたそのあとってわけ。